

K240.8

3

中等國語 三

文部省

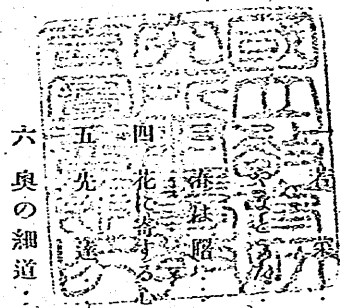
文部省圖書刊行部贈

[前] ¥ .50

(12)

目 録

國 文 篇



六 奥の細道

一
二
三
五
七
十二

昭和二十一年三月二十日印刷 同日發行
昭和二十一年三月三十日發行 同日發行
（昭和二十一年三月三十日 文部省検査済）

著作権所有 著 作 者 文 部 省
發行 東京 神田區 岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者 龜 井 寅 雄
印刷者 東京 牛込區 市谷 柳町一丁目十二番地
大日本印刷株式會社
代表者 佐久間 長吉郎

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Mar. 26, 1946)

國 文 篇

若 菜

古今和歌集



春野のと太火の野守いでみよ今いくかありて
若菜摘みてむ

わが宿の池の藤波さきにけり山ほとゝぎすいつか
來鳴かむ

はちすの露を見て詠める 併 正 遍 昭
はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉
とあざむく

惟喬親王の許にまかりかよひけるを、かしらお
ろして小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶ
らはむとてまかりたりけるに、比叡の山の麓な
りければ雪いと深かりけり。しひてかの室にま
かりいたりてをがみけるに、つれ／＼としてい
ともの悲しくて歸りまうできて詠みておくりけ
る 在原 業 平

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君
を見むとは

初瀬に詣づることに宿りける人の家に久しく宿
らでほどへてのちにいたれりければ、かの家の
あるじかくさたかなむ宿りはあるといひ出し
て侍りければ、そこに立てりける梅の花を折り
て詠める 紀 貫 之

人はいさ心もしらずふるさは花をむかしの香に
に低ひける

歌奉れと仰せられし時に詠みて奉れる
櫻花咲きにけらしなあしひきの山のかひより見ゆ
る白雲

池のほとりにて紅葉の散るを詠める
凡河内躬恒
風ふけばあつるもみぢ葉水きよみ散らぬ影さへ底
に見えつゝ、

内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀しける
時に四季の繪かける後の屏風にかきたりける歌
秋

國 文 篇

住の江の松を秋風ふくからにこゑうちそふるおき
つ白波

是貞親王の家の歌合の歌 紀 友 則

露ながら折りてかささむ菊の花老いせぬ秋の久し
かるべく

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

王 生 忠 岑

みよしの山の白雪ふみわけて入りにし人の音づ
れもせぬ

題知らず

よみ人知らず

わたつみの濱のまさごを數へつゝ君が千年のあり
かずにせむ

とりものの歌

み山には散ふるらし外山なるまさきのかづら色づ
きにけり

一 やまとうた

紀 貫 之

やまとうたは、人の心をたねとして、よろづの言の

に至るまで、又、鶴龜につけて君を思ひ、人をも祝ひ、
逢坂山に到りて手向けを祈り、あるは、春夏秋冬にも
入らぬくさくさの歌をなん撰ばせ給ひける。總べて千
歌、二十卷、名づけて古今和歌集といふ。

三

かくこのたび集め撰ばれて、山下水の絶えず、濱の
眞砂の數多く積りぬれば、今は飛鳥川の瀬になるうら
みも聞えず、さぐれ石の巖となる喜びのみぞあるべき。
それ、さるら、ことは春の花匂ひ少くして、空しき
名のみ秋の夜の長きをかてれば、かつは人の耳にお
そり、かつは歌の心にはおて思へど、たなびく雲のた
ちぬ、鳴く鹿のおきふしは、貫之らがこの世に同じく
生まれて、この事の時にあへるをなん喜びぬる。人麻
呂亡くなりたれど、歌のこととせまれるかな。たと
ひ、時移り、事去り、樂しび悲しび行き交ふとも、こ
の歌のもし、青柳の絲絶えず、松の葉の散り失せずし
て、まさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しくとせま
れらば、歌のさきをも知り、ことの心をも得たらん人

葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげき
ものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつ
けて言ひ出せるなり。花に鳴くうぐいす、水にすむか
はづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌
を詠まざりける。

二

今、すべらぎの天の下知ろしめすこと、四つの時、
九かへりになんなりぬる。あまねき御慈しみの波、や
しまのほかで流れ、ひろき御恵みのかげ、筑波山の麓
よりもしげくおはしまして、よろづのまつりごとを聞
しめすいとま、もろ／＼の事をすて給はぬあまりに、
いにしへのことをも忘れじ、ふりにしことをも興し給
ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、延
喜五年四月十八日に、大内記紀友則・御書所預紀
貫之・前中妻少目凡河内躬恆・右衛門府生壬生忠岑ら
に仰せられて、萬葉集に入らぬ古き歌、みづからのを
も奉らしめ給ひてなん。それが中に、梅をかざすより
始めて、ほと／＼ぎすを聞き、もみちを折り、雪を見る

は、大空の月を見るが如くに、いにしへを仰ぎて今を
こひざらめかも。

三 春は曙 枕 草 子

春は曙。やう／＼白くなりゆく山ぎは少し明かり
て、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃は更なり。闇もなほ、螢飛びちがひ
たる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやがにさして、山のはいと近く
なりたるに、鳥の寝どころへ行くとて、三つ四つ二つ
など飛び行くさへあはれなり。まいて、雁などのつら
ねたるがいと小さく見ゆる、いとをかし。日入り果て
て、風の音蟲のねなど、いとあはれなり。

冬はつとめて。雪の降りたるは、言ふべきにもあら
ず。霜などのいと白く、又、さらでもいと寒きに、火
など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつき／＼し。
晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃・火桶の
火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

二

蟲は 鈴蟲。松蟲。促織。蟋蟀。蝶。われから。ひを蟲。螢。

養蠶いとあはれなり。鬼の生みければ、親に似て、これも恐しき心地であらんとて、親のあしき衣引き着せて、「いそ秋風吹かん折にぞ来んずる。待てよ。」と言ひて、逃げていにけるも知らず、風の音聞き知りて、八月ばかりになれば、ちよちよとはかなげに鳴く、いみじくあはれなり。

ひぐらし。ぬかづき蟲。またあはれなり。さる心に道心おこしてつきありくらん。思ひかけず、暗き所などにほとめきたる、聞きつけたるこそをかしけれ。

蠅こそにくきもののうちに入れつべけれ。愛敬なくにくきものは、人々しう書き出づべきもののやうにあらねど、よろづの物にぬ、顔などに濡れたる足してゐたるなど。

夏蟲、いとをかしくらうたげなり。火近う取り寄せて物語など見るに、草紙の上などを飛びありく、いと

をかし。蟻はにくけれど、かるびいみじうて、水の上などを、たゞ歩みありくこそをかしけれ。

三

うつくしきもの。瓜に書きたるちこの顔。雀の子の鼠鳴きするにをどり来る。三つばかりなるちこの、急ぎて這ひ来る道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。尾にそぎたるちこの、目に髪を覆ひたるをかきはやらで、打ちかたぶきて物など見る、いとうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、さうざき立てられてありくもうつくし。をかしげなるちこの、あからさまに抱きでうつくしむほどに、かいつきて寝入りたるもらうたし。

雛の調度。はちすの浮き葉のいと小さきを、池より取り上げて見る。葵の小さきもいとうつくし。何も何も小さきものはいとうつくし。いみじう肥えたるちこの二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍の薄物など、衣長くて裨上げたが、這ひ出で来るもいとう

つくし。入つ九つ十ばかりなる男の、聲幼げにて文讀みたる、いとうつくし。鶏の雛の足高に、白うをかしげに、衣短なるさまして、ひよ／＼とかしがましく鳴きて、人の後に立ちてありくも、又、親のもとに連れ立ちありく、見るもうつくし。

四

五月ばかり山里にありく、いみじくをかし。澤水もけにたゞいと青く見え渡るに、上はつれなく草生ひ茂りたるを、長々とたゞさまに行けば、下はえならざりける水の深うはあらねど、人の歩むにつけてとばしり上げたる、いとをかし。左右にある垣の枝などのかゝりて、車の屋形に入るを、急ぎとらへて斬らんと思ふに、ふとはづれて過ぎぬるもくちをし。蓬の車に押しひしがれたるが、輪の舞ひ立ちたるに、近うかへたる。香もいとをかし。

五

降るものは 雪。霰。突はにくけれど、雪の真白に

てまじりたる、をかし。雪は、拾皮葺きいとめでたし。少し消えがたになりたるほど。又、いと多うは降りぬが、互の目ごとに入りて、黒う真白に見えたる、いとをかし。時雨。霰は板屋。霜も板屋。庭。

六

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして、物語などして集り侍ふに、「少納言よ、香爐峯の雪はいかならん。」と仰せられければ、御格子上げさせて、御簾高く巻き上げれば、笑はせ給ふ。

人々も皆さる事は知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄りざりつれ。「なほ、この宮の人にはさるべきなあり。」と言ふ。

四 花に寄する心

岡倉天心の「茶の本」を見ると、牡丹は、盛装した美しい侍女が水を與ふべきもの、寒梅は、青い顔をしてほつそりとした修道士が水をやるべきものと書いた

古書が、支那にあると記されてゐる。陶淵明が破れた籬の前に坐して野菊と語つたのも、林和靖がたそがれに西湖の梅花の間を逍遙しながら、暗香浮動の趣にわれを忘れたといふのも、同じく支那の話である。

わが國の茶や花の宗匠は、花を選ぶに際して、一枝一條もみだりに切り取ることをせず、自分の心に描く美の配合を目的として注意深く選擇し、もし絶対に必要である度を越えて切り取るやうなことがあれば、かれらはいたくこれを恥とした。天心はこのことを、かれらが宗教的尊敬を以つて花を見たのであると言つてゐる。花に對してかういふ態度を以つて臨んだかれらは、又、満足に生け花が出来上ると、床の間にそれを置く。さうして、その効果を妨げるやうな物は一切その近くに置かない。そこへ一幅の畫を掛けるにして、例へば石州が湖沼の草木を思はせるやうに水盤を生けた時は、相阿彌の空を飛ぶ鶴の繪を配したといふやうに、深く情趣の調和に心を用ひる。花は床の間に王子の如く坐つてゐる。客や弟子たちはその室に入るや、先づ花に向かつて丁寧なお辭儀をしてから、始め

て主人に挨拶をする。さういふことを天心は書いてゐる。しかし、これらにも増して一層痛切にわれわれの心を打つのは、花が色褪せると、宗匠はねんごろにそれを川に流し、又は丁寧なこれを地中に埋め、時にはその靈を弔つて墓碑を建てることさへもがあると、かれが言つてゐることである。

東洋の人たちは花を物としては見なかつたのである。といつて、ギリシャ人の如く花のうちに神々のいのちを見、天體と共に地の花をも、大宇宙の神話圖繪のうちに織り込んだのもなかつた。かれらは花をどこまでも花として見たのである。花は單なる物——利用價值ある單なる物でもなく、それかといつて、又、何か超越的な神の現れでも、その痕跡でもなかつた。花は唯美しき存在なのである。その現實の姿のまゝにたゞに美しき存在なのである。美しきものを美しきが故に美しきものとして、あくまですなほにこれに對する時、おのづからそこに一つの生活態度が生まれて来る。そこには、たくらみもおもはくもない。花に寄する一片の真心のまゝに、美しきものを唯すなほに美しと

感動して、そこから一步もはづれない心のまゝに、花に對するこれらの態度がものづから出て来るのである。

陶淵明は坐して菊を取り寄せることはできなかった。よき友を訪ねる如く、みづから起つて菊を訪ね、しかも菊のいゆちにふさはしく、破れた籬に清く香るその姿を、特に求めて行かずにはゐられなかつたのである。美女をして牡丹に水を運ばせたのも、寒梅に僧を遣したのも、單に人間の觀賞の欲に基づくのではなく、花それの品格に對する心遣ひ、けはしい言葉を使ふならば、美に對する道徳からでなければならなかつたであらう。

一枝を選ぶに心を盡くすのもそのためである。生け花に向かつて先づ禮を行なふのもそのためである。人間に對しても自然に對しても、道は勝手に作られ得るものではない。道はそのものの本來の意味に従つて、われとの間におのづから定まつて来るのである。随つて又、その道に據るのでなくては、そのものに正しく接することはできない。かりそめの美には、いかなる人の心も繫がつて行くことができるであらう。しか

し、すぐれた美が開かれて来るためには、人に於いて行ぜられる道がなくてはならないのである。アルプスの雪溪を親しく見るためには、高峻を攀ちなければならぬといふことを、一つの譬喩としていふこともできるかもしれない。友情を以つて花を訪れ、禮を以つて花に接し、一段に向かつてもその個性を敬重して苟もしないといふやうなことも、この道の二端にほかならないのである。

が、色褪せた花をねんごろに川に流し、地に葬り、遂には花のために墓碑を建てるといふに至つては、この道もまた窮れりといはなくてはならない。しかも、花に寄する心のこれほどまでに切實を極めるといふことは、日本人の心をはかにしては、見ることができないのではなからうか。

(木村素衛ノ文ニ據ル)

五 先 達 徒 然 草

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりけ

れば、心愛く覺えて、或る時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺・高良などを拜みて、かはかりと心得て歸りにけり。

さて、かたへの人に會ひて、「年來思ひつること果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」と言ひける。

少しの事にも先達はあらまほしきことなり。

二

能をつかんとする人、よくせざらんほどは、なまじひに人に知られじ、うち／＼よく習ひ得て差し出でたらんこそ、いと心にくからめと常に言ふめれど、かく言ふ人、一藝も習ひ得ることなし。未だ堅固かたほなるより上手の中に交りて、譲り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎて嗜む人、天性の竹なけれども、道になづまず、みだりにせずして年を送れば、堪能の嗜まざるよりは遂に上手の位に至り、徳だけ、人にゆるさ

れて、並びなき名を得ることなり。天下の物の上手といへども、初めは不堪の聞えもあり、無下の取障もありき。されどもその人、道の矯正しく、これを重くして放捨せざれば、世の博士にて萬人の師となること、諸道變るべからず。

三

貝を覆ふ人の、わが前なるをばあきて、よそを見渡して、人の袖の陰、膝の下まで目を配る間に、前なるをば人に覆はれぬ。よく覆ふ人は、よそまでわりなく取るとは見えすして、近きばかり覆ふやうなれど、多く覆ふなり。非盤の隅に石を立ててはじくに、向かひなる石をまぼりてはじくは當らず。わが手もとをよく見て、こゝなるひじりめを直ぐにはじけば、立てたる石必ず當る。

よろづの事、ほかに向きて求むべからず。たゞこゝもとを正しくすべし。清獻公が言葉に、「好事を行じて前程を問ふことなかれ。」といへり。世をたもたん道もかくや侍らん。内をつゝします、軽くほしきまゝに

してみだりなれば、遠き國必ず背く時、始めて謀を求む。「風に當り濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚かなる人なり。」と醫書にいへるが如し。目の前なる人の憂ひをやめ、恵みを施し、道を正しくせば、その化遠く流れんことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、師をかへして徳をしくはしかざりき。

四

或る者、子を法師になして、「學問して、因果の理をも知り、説經などして世わたるたづきとせよ。」と言ひければ、教へのまゝに説經師にならんために、先づ馬に乗り習ひけり。輿・車はまたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎へにおこせたらんに、桃尻にて落りなれば、心愛かるべしと思ひけり。次に、佛事の後、酒などすゝむることあらんに、法師の無下に能なきは、恨那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つのわざ、やう／＼さかひに入りければ、いよいよよくしたく覺えて嗜みけるほどに、説經習ふべき際なくて年寄りにけり。

この法師の女にもあらず、世間の人、なべてこの事あり。若きほどは諸事につけて、身を立て、大きな道をも成じ、能をもつき、學問をもせんと、行く末久しくあらます事ども、心には掛けながら、世をのどかに思ひて、打ち怠りつゝ、先づ差し當りたる目の前の事にのみ紛れて月日を送れば、事ごととなすことなくして身は老いぬ。遂に物の上手にもならず、思ひしやうに身をもたず、悔ゆれども取り返さるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。

されば、一生のうちにはむねとあらまほしからん事のうちに、いづれかきさるとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、そのほか思ひ捨てて、一事を勵むべし。一日のうち一時のうちにも、あまたの事の來たらん中に、少しも益のまざらん事をいとみて、そのほかをば打ち捨てて、大事を急ぐべきなり。いづ方をも捨てじと心に取り持ちては、一事も成るべからず。例へば、碁を打つ人、一手もいたづらにせず、人先立ちて、小を捨て大に就くが如し。それにとりて、三つの石を捨てて十の石に就くことは易し。十を捨てて十

一に就くことは難し。一つなりともまさらん方へこそ就くべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へにくし。これをも捨てず、かれをも取らんと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。

京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行き着きたりとも、西山に行きてその益さざるべきことを思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。こゝまで來着きぬれば、この事をば先づ言ひてん、目をさゝぬことなれば、西山の事は歸りてまたこそ思ひ立ためと思ふ故に、一時の懈怠即ち一生の懈怠となる。これを恐るべし。

一事を必ずなさんと思はば、他の事のやぶるゝをものいたむべからず。人のあざけりをも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、或る者、「ますほのすゝき、まそほのすゝきなどいふ事あり。わたのべの聖、この事を傳へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「養笠やある、貸し給

へ。かのすゝきの事習ひに、わたのべの聖のがり訪ね罷らん。」と言ひけるを、「餘りにもの騒がし。雨止みてこそ。」と人の言ひければ、「無下のことをも仰せらるゝものかな。人の命は雨の霽れ間をも待つものかは。おれも死に、聖も失せなば、尋ね聞きてんや。」とて、走り出でて行きつゝ、習ひ侍りにけりと申し傳へたるこそ、ゆゑしくありがたう覺ゆれ。「敏き時は則ち功あり。」とぞ、論語といふ文にも侍るなる。このすすきをいふかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

五

一道に携る人、あらぬ道のむしろに臨みて、「あはれ、わが道ならましければ、かくよそに見侍らしものを。」と言ひ、心にも思へること、常のことなれど、よにわろく覺ゆるなり。知らぬ道の養ましく覺えは、「あな、養まし。などか習はざりけん。」と言ひてありなん。わが智を取り出でて人に爭ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙を噛み出す類ひなり。

人としては善に誇らず、物と争はざるを徳とす。他にまさることのあるは大きな失なり。品の高さにて、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそ言はねども、内心にそこばくの咎あり。つくしみてこれを忘るべし。をこにも見え、人にも言ひ消たれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明らかにその非を知る故に、志常に満たずして、遂に物に誇ることをなし。

六

人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝに言はんはをこがましとにや、心惑はすやうに返り事したる、よからぬことなり。知りたる事も、なほ定かにも思ひてや問ふらん。又、まことに知らぬ人もなどかなからん。うらゝかに言ひ聞かせたらんは、おとなしく聞えなまし。

人は未だ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまゝに、「さてもその人の事の淺ましき。」などばかり言ひやりたれ

は、「いかなる事のあるにか。」と押し返し問ひにやるこそ心づきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞き漏らすあたりもあれば、おぼつかかなからぬやうに告げやりたらん、悪しかるべきことかは。

かやうの事は、ものなれぬ人のあることなり。

七

久しく隔たりて會ひたる人の、わが方にありつる事、かず／＼に残りなく語り續くるこそあいなけれ。隔てなくなれぬる人も、ほど經て見るは、恥づかしからぬかは。次様の人は、あからさまに立ち出でて、今日ありつる事とて、息も繼ぎ敢へず語り興ずるをかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きて言ふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中に打ち出でて、見る事のやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。をかしきことを言ひてもいたく興ぜぬと、興なきことを言ひてもよく笑ふにぞ、しなのほど量られぬべき。

人の身様のよしあし、才ある人はその事など定め合

へるに、おのが身を引さかけて言ひ出でたる、いとわ
びし。

八

平宣時朝臣、老いの後、昔語り、「最明寺入道、
或る宵の間によばるゝことありしに、『やがて。』と申
しながら、直垂のなくて、とかくせしほどに、また使
來たりて、『直垂などの候はぬにや。夜なれば、異様な
りとも、とく。』とありしかば、蓑をたる直垂、うちう
ちのまゝにて罷りたりしに、鍬子に土器取り添へて、
もて出でて、『この酒を獨りたうべんがさうくしけ
れば、申しつるなり。さかなこそなけれ。人は静まり
ぬらん。さりぬべき物やあると、いづくまでも求め給
へ。』とありしかば、紙燭さして、くまなくを求めしほ
どに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見
出でて、『これを求め得て候。』と申ししかば、『罪足
りなん。』とて、心よく數獻に及びて興に入られ侍り
き。その世にはかくこそ侍りしか。』と申されき。

六 奥の細道

松尾芭蕉

門 出

月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人な
り。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎
ふる者は、日々旅にして旅を休みかたす。古人も多く
旅に死せるあり。予もいつれの年よりか、片雲の風に
誘はれて、漂泊の思ひ止まず。海濱にさすらへ、去年
の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひて、やゝ年も暮
れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゝる神の
ものにつきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて取
る物手につかず、股引の破れをつくり、笠の緒附け替
へて、三里に参詣するより、松島の月先づ心に懸りて、
住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替る代を雛の家
表八句を庵の柱に掛けおく。

彌生も末の七日、曙の空麗々として、月は有明にて
光をさまれるものから、富士の峯かすかに見えて、上
野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し。陸まじき

限りは宵よりつとひて、舟に乗りて送る。千住といふ
所にて舟を上れば、前途三千里の思ひ胸に塞がりて、
幻の巷に離別の涙をそぐ。

行く春や鳥鳴き魚の目は涙
これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々
は途中に立ち並びて、後影の見ゆるまではと見送るな
るべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚、たゞかりそめ
に思ひ立ちて、吳天に白髮の恨みを重ぬといへども、
耳にふれて未だ目に見ぬさかひ、もし生きて歸らばと
定めなき頼みの末をかけ、その日漸く草加といふ宿に
たどり着きにけり。

瘦骨の肩に掛れる物、先づ苦しむ。たゞ身すがらに
と出で立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・
墨・筆の類ひ、あるはさがたき簑などしたるは、さ
すがに打ち捨てがなくて、路次の煩ひとなれるこそわ
りなけれ。

白 河

國文篇

松 島

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて
旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしこともわりな
り。中にもこの關は三關の一にして、風塵の人心をと
どむ。秋風を耳に残し、紅葉を面影にして、青葉の梢
なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲き添ひ
て、雪にもこゆる心地をする。古人冠を正し、衣袋を
改めしことなど、清輔の筆にもとめあかれしとぞ。
卯の花をかざしに關の晴れ着かな 曾良
とかくして越え行くまゝに、阿武隈川を渡る。左に
會津根高き、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野
の地をさかひて山連なる。かけ溜といふ所を行くに、
今日は空曇りて物影映らず。須賀川の驛に等舁といふ
者を訪ねて、四五日とゞめらる。先づ白河の關いかに
越えつるやと問ふ。長途の苦しみ身心疲れ、且つは風
景に魂奪はれ、懷舊に腸を斷ちて、はかくしう思ひ
めぐらさず。
風流の初めやちくの田植うた

抑ことふりになれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて江の中三里、浙江の潮をたふ。島々の數を盡くして、峙つものは天をさし、臥すものは波に腹ばふ。あるは二重に重なり、三重に疊みて、左に分れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こきやかに、枝葉潮風に吹き撓めて、屈曲むのづからためたるが如し。その氣色皆然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神の昔、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆を振るひ言葉を盡くさん。

雄島が磯は、地續きて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた、松の木陰に世をいとふ人も稀々見え侍りて、落穂・松笠など打ちけぶりたる草の庵靜かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懐かしく立ち寄るほどに、月海に映りて晝の眺めまた改む。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて風雲の中に旅寝すること、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす 曾良
予は口を閉ぢて眠らんとして寝られず。舊庵を別る時、素堂、松島の詩あり。原安適、松がうらましの和歌を贈らる。袋を解きて今宵の友とす。且つ、杉風、濁子が發句あり。

平泉

十二月平泉と志し、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉更・鶺鴒の行き交ふ道そこともわかず、遂に道路みながへて、石巻といふ湊に出づ。黄金花咲くと詠みて奉りたる金華山海上に見渡し、數百の廻船大江につどひ、人家地を争ひて竈の煙立ち續けたり。思ひかけずかゝる所にも來たれるがなと、宿借らんとすれど、更に宿賃す人なし。漸くまどしき小屋に一夜を明かして、明くればまた知らぬ道迷ひ行く、袖の渡り、尾ぶちの牧、眞野の菅原などよそ目に見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る。其の間二十餘里ほどと覺ゆ。

中等國語 三

文部省

文部省調査部刊行課寄贈

(中) ¥ 1.00